

## 第23回秩父宮記念スポーツ医・科学賞

第23回秩父宮記念スポーツ医・科学賞・功労賞受賞者の勝田茂先生と奨励賞受賞グループ代表の長ヶ原誠先生のお二人から受賞コメントをいただきました。研究者を目指したきっかけ、これからのスポーツ界に期待すること、研究者を目指す若者たちへのエールをいただきました。

功労賞受賞者：勝田 茂(筑波大学名誉教授)

運動生理学、特に筋肉生理学を専門として研究に携わり、骨格筋線維の成長や変化に関して数多くの研究を行い、多大な功績を残した。

アスリートの筋組織を実際に採取することで、筋線維組成には競技特性に応じた特徴があり、スポーツの適性を検討するうえで重要な要素となることを発見した。また、これらの研究結果を、発達や加齢に伴う健康・体力問題への課題解決に向けて活用した。



奨励賞受賞グループ：「マスタース甲子園」開催を通じた生涯スポーツ推進プロジェクト研究グループ

代表者：長ヶ原 誠(神戸大学大学院教授)

本グループは、2004年から全国の高校野球OB/OGが、性別・世代・甲子園出場の有無・元プロアマ問わず、出身校別に同窓会チームを結成し、甲子園出場を目指す「マスタース甲子園」の開催を通じて、生涯スポーツの推進に係る研究を実践している。

本グループの活動はスポーツだけでなく現代社会の諸活動にも対応した、社会貢献度の高いユニークな取り組みである。

このイベントの開催と本グループの研究は、今後の生涯スポーツの発展に寄与するものであり、さらなる活躍が期待される。



# 第23回秩父宮記念スポーツ医・科学賞

功労賞受賞者：勝田 茂(筑波大学)

秩父宮記念スポーツ医・科学賞の受賞誠におめでとうございます。受賞の感想をお聞かせください。

これまで、骨格筋線維組成とスポーツパフォーマンスに関する研究、高齢者の健康づくりなど、行ってきた研究は多くの方々の支えによって為されたものであり、感謝あるのみです。これらの研究が評価され、思いがけない受賞に驚くばかりですが、名誉ある賞で大変光栄に思っております。

幼少期、小学校、中学校、高校、大学とどのようにスポーツにかかわってききましたか？

小学生時代；昭和20年代前半、自宅の近所の空き地で、三角ベースで野球を始めたのがきっかけ。中学生時代；軟式野球部。高校生時代；レスリング部。全国高校大会で団体準優勝、個人3位の成績。大学時代；進学した大学にレスリング部がなく、柔道部へ。白帯から始めて辛い練習の毎日だったが、3段まで昇段。30歳過ぎからテニスを始め50年以上で、全日本ベテランテニス選手権大会で優勝4回。世界シニアテニス選手権大会日本代表7回。

良い思い出；喜寿（77歳）の時、初めて日本一になれたこと。  
苦い思い出；高校時代、レスリングで減量に失敗し大敗したこと。

大学時代、特に力を入れていたことを教えてください。

広い教養を身につけること。大学では自分の主専攻とする領域だけでなく、他の分野にも興味を持ち、他学部で開講されている授業もたくさん受講した。例えば、高校社会科の副免取得に必要な50単位近い単位（歴史・政治経済・時事問題など）、他学部の専門科目を取得したことなど。

なぜ、スポーツの研究、特に運動生理学を専門とした研究を始めたのかお聞かせください。

1950年代当時、我が国ではスポーツ・健康科学専攻の大学院は開設されていなかった。そこで、高校の保健体育の教員になることを目指していた。外国から帰国されたばかりの杉靖三郎教授の「世界の新しい健康問題」に魅かれ、とりわけスポーツが身体に及ぼす影響について興味を持ち、運動生理学研究室へ入室。杉教授からは、研究はまずオリジナリティ、そして方法論をしっかりと、の教えを受けた。これは生涯にわたって、研究に向き合う自分の礎となっている。

# 第23回秩父宮記念スポーツ医・科学賞

功労賞受賞者：勝田 茂(筑波大学)

研究者として最もうれしかったこと、うまくいったことを教えてください。

1970年代、骨格筋に関して最も盛んに行われていた研究は筋力に関してであり、細胞レベルでの筋組織については殆ど行われていなかった。そのころ電子顕微鏡を用いて筋肥大について調べた演題を学会大会に提出したところ、最終日午後のセッションで、会場には数人しか学会員はいなかった。大学に帰ってこの様子を緒方道彦教授に話したところ、「研究にもはやりすたりがある。サインカーブだよ、勝田君。生涯に一度でもプラス方向に振れて脚光を浴びることができれば運がいいと思わなくてはね」と慰められた。それから20年後、学会大会の会長から、総会で特別講演の依頼があり、大きな会場で、満員の学会員の前で話すことができたのは、本当に嬉しいことだった。

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会が開催されました。大会終了後のスポーツ界に期待することを教えてください。

一流のアスリートのためばかりでなく、性・年齢・障害の有無を超えて、希望するすべての国民がスポーツに親しむ機会が得られ、生涯を通じて健康な生活を送れるよう、一層力を入れてほしい。

スポーツの研究者を目指す若者にアドバイスをお願いします。

スポーツと学業の両立を目指してほしい。スポーツを実践することによって、自らの体験を通してスポーツの技術、体力、戦術、そして精神力などについて学ぶことができる。また将来胸を張って師と呼べるいい先生と出会えるかが大切。大学で職を得たい場合には、博士号の取得・外国への留学・研究業績の3点が必要になる。採用にあたって大学は学歴を問わない建前になっているが、実際は超学歴社会であることを知っておいてほしい。

研究者として最も困難だと感じたことを教えてください。また、それをどのように解決していったかを教えてください。

研究の仮説に基づいて行った実験がうまくいかず、目指した結果が得られなかったとき。解決法としては、①可能な限り、関連分野も含めて文献研究をやり直す。②いろいろな機会を通じて多くの方々からアドバイスを受け、新たな研究計画を立て、実施に移す。

勝田先生が考えるスポーツの良さ・スポーツの価値を教えてください。

80歳代・90歳代で世界で活躍しているシニアアスリートの研究から言えることは、スポーツは生きがいになるということ、日常のトレーニングによって10~20歳若い体力が維持されていること、健康寿命が長いこと、高齢になってからでも新しい友人ができること、等々。スポーツを始めるに遅すぎることはなく、50歳を超えてから泳ぎ方を教わり、数年後にはシニア世界チャンピオンになった人も多い。「Never too late」である。また「継続は力なり」である。

# 第23回秩父宮記念スポーツ医・科学賞

奨励賞受賞グループ代表:長ヶ原 誠(神戸大学大学院教授)

秩父宮記念スポーツ医・科学賞の受賞誠におめでとうございます。受賞の感想をお聞かせください。

大変名誉な賞を頂き光栄です。本研究の対象であるマスターズ甲子園は、研究グループと共に、全国の参加チームやスタッフ・ボランティア、大会支援者の方々によるご努力とその積み重ねにより合作してきた大会ですので、チーム受賞としてこの喜びを共有しており、皆で感謝しております。

幼少期、小学生、中学生、高校生、大学生とどのようにスポーツにかかわってきましたか？

スポーツを始めたきっかけ：父とのキャッチボールから始まり、それからずっと野球に熱中していました。

ご自身の専門スポーツ：体力づくりや健康増進のためのヘルススポーツはウェイトトレーニング、遊びとして楽しむレジャースポーツはボートフィッシング、競技として大会出場を目指すマスターズスポーツで硬式野球を加齢と共に楽しんでいます。

スポーツでの良い思い出、苦い思い出：良い思い出としては、1998年ワールドマスターズゲームズ・ポートランド大会の400m走決勝で元オリンピック選手と走れたこと（タイム約40秒差）、2017年ワールドマスターズゲームズ・オークランド大会にマスターズ甲子園ジャパンチームとして出場し銅メダルを獲得できたことです。苦い思い出は、マスターズ甲子園2014大会に母校・鹿児島鶴丸OBチームの投手として念願の甲子園のマウンドに立つも、1つのアウトも取れずにノックアウト降板したことです。

大学生時代、特に力を入れていたことを教えてください。

学部時代は、単位取得とゼミ活動についていくのに必死でした。留学後の院生時代には、博士論文執筆の傍ら、山岳アウトドアでフィールドワーク（遊び）に夢中でした。

スポーツの研究にかかわるようになったきっかけをお聞かせください。

大学時代の先生方やゼミ活動、国際シンポジウムの機会に恵まれ、スポーツ科学の世界にすっかり魅了されました。

# 第23回秩父宮記念スポーツ医・科学賞

奨励賞受賞グループ代表:長ヶ原 誠(神戸大学大学院教授)

研究者として最もうれしかったこと、うまくいったことを教えてください。

私は社会科学の分野で、スポーツプロモーションによる社会活性化への貢献とその方法論を探求するアクションリサーチを目指しています。この中で特に、研究メンバーと新たな推進事業を企画実践し、仮説通りの成果や効果が得られることは勿論ですが、想定外となるスポーツのもつ新たな価値や可能性に出会い、それらをプロジェクトチームで共感する瞬間が研究活動の醍醐味だと感じています。

長ヶ原先生が考えるスポーツの良さ・スポーツの価値を教えてください。

人生と社会を活性化できる人類が作り出してきた最高の遊び文化だと思います。

スポーツの研究者を目指す若者にアドバイスをお願いします。

イメージできる将来図は実現可能です。自分達が思い描く理想像を共有し、プロジェクトとして可視化し、皆で時間とエネルギーを投資しながら、新たなスポーツの世界観創造に向けてチャレンジしてほしいと思います。

研究者として最も困難だと感じたことを教えてください。また、それをどのように解決していったかを教えてください。

スポーツ振興の研究による新たな可能性や価値の探究と言っても、実際の社会の中で生起させていくには時間と継続力を要しますので、その研究活動のスタミナが最大の課題だったと思います。縦断的なアクションリサーチではそのアクション自体の妥当性や継続性が危ぶまれる場面がありましたが、その際にはそのアクションの意味づけをチーム内で再検討・再共有すると共に、研究意義と研究対象者についての原点を皆で振り返りながら、少しずつ蓄積し前進してきたと感じています。

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会が開催されました。大会終了後のスポーツ界に期待することを教えてください。

2021年に感動したそれぞれのスポーツシーンが、次は自ら躍動する「する」スポーツとして民意度の高い生涯スポーツ文化振興に繋がり、それを支援していく「ささえる」スポーツ文化についても益々拡大・発展していくことを願っています。